

きずな

いのち。つながるマガジン

Vol.12

2022.3

あんとん
暗澹たる世に

見いだす光



濁世に生きる

「現代社会」と呼ばれる今を暮らしていますが、いかがですか。互いに年を重ねる中で、どのような方向に世の中が向かっていると感じますか。

親鸞聖人がいらつしゃったときと比べる気持ちはありませんが、お聞かせいただく大変な時代であったと知らされます。生まれ来る子どもの数より、圧倒的に死んでいく人の数の方が多かったようです。

ただ、いつの時代にあったとしても、仏さまの願いに背を向け、互いに自己中心の生き方によって不安や生きづらさがある、そういう社会のありようを「濁世」と言うのでしょうか。その濁世を構成する一人が私でもあることを見失ってはなりません。

ところで、親鸞聖人ご往生の様子が、本願寺三代覚如上人によって「聖人（親鸞）弘長二歳壬戌仲冬下旬の候よりいささか不例の氣まします。それよりこのかた口に世事をまじえず、ただ仏恩のふかきことをのぶ……ついに念仏の息たえをはりぬ」と記されています。最晩年は世間の話題を口にされることはなく、た

だお念仏申されるばかりでありました。そのお念仏は、私の意識の有無に関係なく、生きるために必要な「息」のような存在でありました。ですから、親鸞聖人のご生涯は生活の中に念仏があったのではなく、お念仏申される中にご自身の生活があったと受け取るのです。そのお念仏申す人生を親鸞聖人のお言葉に求めてみたいと思います。

かつて親鸞聖人がお念仏のみ教えを広められた関東において、親鸞聖人が去られた後にどうしても確かめておかなければならないような不安や混乱が生じました。はるばる命がけて京都まで宗祖を訪ねてこられる方もあったようですが、そうした問いに親鸞聖人は手紙を書かれています。その中に「としごろ念仏して往生ねがふるしには、もとあしかりしわがごころをもおもひかへして、とも同朋にもねんごろにこころのおはしましあはばこそ、世をいとふしるしにても候はめとこそおぼえ候へ」と、自覚しなさいと締めくくられています。

「いとふ」には、「嫌う」という意味がある一方で「かばう」「大切にすること」という意味がありますので、「長い間、お育てによって念仏申す身になったその姿には、かつての自らの悪い心をあらためて、友だちや同じ念仏の法に連なる仲間

と心を通じて親しむ思いを持つようになり、迷いの世界を嫌い、私と私の周りの人々とともに大切にすべき世を大切に生きる生き方になるのです。しっかりと自覚してください」といただくのです。

親鸞聖人におかれては、最晩年は仏恩報謝のお念仏ばかりで世間のことは口にされませんでした。しかし、人生をともに歩む上での生き方には、道理に外れ誤ったことに対しての姿勢がごのお手紙から伝わってくるのです。また何より、主著である『教行信証』にご自身の主義や思想・主張をほとんど書かれず、釈尊や七高僧方をはじめとする方々の言葉を引かれて浄土真宗の教義体系を示されていることも、かつての「承元の法難」に対する親鸞聖人の姿勢であると受け取る時、大変厳しいことですが、「濁世に生きる」方向が明らかになってくるように思われるのです。

（齋藤英明）



御同朋の社会をめざして

2012（平成24）年5月7日前編・14日後編としてNHKテレビ番組の「鶴瓶の家族に乾杯」が放送されました。番組では、出演の俳優が自身のルーツを探すとして、浄土真宗本願寺派の寺院を訪問して、門徒明細簿と門徒戸数控を過去帳と伝え、記載された地名と名前が放映されました。過去帳等は、本人の申請であっても直接閲覧することはできません。

これまで本願寺派は、1983（昭和58）年と97（平成9）年に、二回の法名・過去帳調査を実施しています。一度目は1979年にアメリカで開催された第三回世界宗教者平和会議での全日本仏教会理事長の差別発言を受けて、83年に差別法名の調査が行われましたが、「平等の教えの中に差別はない」と確認もせず回答をしたことや部落差別に無関心で人ごとと考えている実態が明らかになりました。その後、教団内で差別事件が連続し、部落解放同盟から糾弾を受け、再調査にあたり事前研修を行い、寺院の歴史と部落問題を自分の課題

として、二回目の調査が取り組まれました。

法名・過去帳調査を受けて「過去帳又はこれに類する帳簿の取扱基準」を定め、過去帳（永代経記録簿・墓地管理簿・門徒現在帳など門徒記録簿全般）の閲覧禁止（公開禁止）と、記載すべき事項を①法名②俗名③死亡年月日④性別（今後の課題です）⑤年齢⑥遺族代表名（統柄）⑦遺族代表者現住所として、それ以外の基本的人権を侵害する記載がある場合は全面的に書き換えを行うこと、門徒からの問い合わせについては、書面にて目的・対象等を明記し、直接の先祖の関係部分を限定して抜き書き開示することと定められました。

しかし、今回のNHKテレビ番組の放映で、寺院では過去帳が閲覧でき、情報を得ることができると視聴者に思わせた責任と影響の大きさを受け止め、身元調査の深刻さと差別性についての学びの継続と差別を助長する教育的課題について問題提起がなされ、經典の中の差別語について教団全体の課題として学びが進められています。

寺院で預かる門信徒の情報は個人情報であり、個人情報保護法は人権侵害にあたり、差別を助長・拡大する行為となります。2011年に発覚した「プライム事件」は、個人情報秘密裏に売買されている社会の事実を知らせ、その目的は約半数が結婚相手の身元調査であるという現実と、

1968年の「壬申戸籍」の閲覧禁止措置以降に寺院が身元調査の情報元になっているという事実でした。そうした歴史を踏まえ、身元調査を必要とする社会を問題として、部落差別の現実に学び、解消に向けた歩みこそが同朋教団の姿であると受け止めていきたいと思います。

そして今年、全国水平社創立大会から百年の節目となります。1967（昭和42）年に、同和教育振興会が被差別部落の宗教調査を実施し、約九割が浄土真宗の門徒で、内約八割が本願寺派の所属であることが確認されています。浄土真宗本願寺派にとつて、差別する・差別されるという関係からの解放を、水平社創立から百年の歴史に学び、立教開宗から八百年を検証しなければなりません。明治憲法の「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」の条件は、それ以前の時代も同じであり、権力のルールに従順で、国家の名に於いて実施されることを遵守することを受容してきた歴史を持つています。差別の容認と戦争を遂行した教学の過ちに学び、現実の社会を見据えて、御同朋の社会の実現をめざした運動を推進します。併せて、沖縄返還・日中国交正常化五十年の年でもあり、社会的矛盾を課題とする念仏者で在りたいものです。

（中島清志）



寺小屋

つながりの再生

お寺の境内を駆けまわる子どもたちの声が響く。見守る大人たちの心は穏やかで、どこか懐かしさを想わせる風景が「寺小屋」にはある。

★ 寺小屋の縁

信州大学の学生を中心とした子ども支援活動グループ「またあいこ」が、本願寺長野別院を会場に、2021年7月から月1回子ども居場所であり多世代交流の場として「寺小屋」を開催している。以前から長野市内で子ども食堂を運営していた「またあいこ」が、子どもたちが伸び伸びと安心して遊び学べる環境を求めていたことと、地域に開かれたお寺や未来のお寺の在り方を模索していた齋藤英明輪番はじめ僧侶、門信徒の想いが重なったことが縁となった。

「またあいこ」共同代表のひとり山口泰聖さん（信大特別支援教育コース2回生）は、環境が子どもの成長に大きく影響することをふまえ、子どもたちが一定の教育の場だけに限らず、多様な人と関わりさまざまな体験で成長していける場を提供したいと願ひ続けていたという。その意味でお寺は多様な人たち



い」と話してくれた。子どもにとって安心や安全が担保され、自分が自分で居られる場所が必要とされていることは、寺小屋の存在意義を確証させたが、人とつながることや体験することが子どもたちの日常から奪われていることを示唆するものでもあった。

★ 子どもの貧困とは

2015年に本願寺派総合研究所が中心となり作成した「平和に関する論点整理」のなかで、社会のなかに平和が壊れていく原因があるという構造的な暴力について、向き合う必要性が提起された。おりしも同年、人類と地球の未来への存続危機から、国連で

がつながる場としての歴史や背景があり、とても魅力的だと話してくれた。「寺小屋」のネーミングには、人と人がつながり地域で子どもたちを大切に守り育む場となることへの願いが込められている。

★ 第3の場所

寺小屋は子どもたちにとって、家でも学校でもない「第3の居場所」となることを目標とした。これは単に3番目の場所ということ



「誰一人取り残さない」という理念に基づきSDGs（持続可能な開発目標）17目標と169ターゲット）が採択され、その第1目標が「貧困の克服」となっている。これは貧困が現代社会のひずみとして生起していることを伝えるものだ。日本も例外ではなく、とくに1980年代から子どもの※相対的貧困率が高まっていて、現代では子どもの7人に1人が貧困とされる。子どもの貧困は、低所得による生活苦だけではなく、本来子どもが利用できる資源や機会を享受できず、未来に対して自由な選択ができないという「排除」「剥奪」の姿である。社会に潜在する構造的暴力のひとつといえるだろう。子どもたちの日常に「特別」が不足しているのではなく、「当たり前」が不足しているのだ。子どもの貧困問題では、子どもたちの「当たり前」の埋め直し」が求められているのであり、その克服には、地域や他者との「つながり」が大きな力になり得るはずだ。お寺がその「結び目」としての役割を担えないだろうか。

★ つながりの再生

コロナ禍で、お寺を取り巻く環境も随分と変化した。暮らしのなかで人々の仏教に対する信仰やお寺への信頼が確かに育まれていかなければ、お寺を必要とする人はどんどん減っていくだろう。いま、お寺の持続可能性が問われている。寺小屋の活動が周知されるにつれ、教区寺院や僧侶、門徒や近所の人たちが食材を届けてくれたり、寄付や手伝いの申し出も増えた。現代社会のなかで希薄となっ

ではなく、子どもが「この場所に来ると安心できる」拠り所になるということだ。そのために、大人の物差しではなく、子どものなかにある物差しを大切にしよう。子どもがスタッフ間で共有され、ルールは最低限の安全を守るものだけとした。また、今お寺にあるものを基本とし、与えずぎ手を掛けすぎないなかで子どもの自主性や発想力を大切に作る場作りを心がけた。開催の告知は、SNSを活用したり、対象地区の学校や児童館にチラシを持ち込んで周知に努めた。

★ 寺小屋の風景から

活動がスタートして半年が過ぎたが、賑わうときもあれば、誰ひとり来ないときもある。しかし効率や評価を求める場所ではないのだから、場が開かれていることが重要と考えている。当初は子どもとの関わり方を危惧する思いもあったが、子どもはきちんと大人の立ち位置を感じて向き合ってくる。汗びっしょりに境内を走りまわる子がいれば、静かに広間で読書をする子もいる。2階では空調の効いた部屋で受験生たちが勉強をしている。そこに寄り添う学生たちや見守る大人たちの姿がある。

小学4年生の男子は「いろんな人が遊んでくれて、走っても怒られないから楽しい。また来たい」と笑顔。参加児童の母は、「最近の子どもは家のなかにこもりがちで、外で走りまわって遊ぶことができない。子どもがうれしそうにはしゃぐ姿を久しぶりに見られたこと、安心して遊べる場所があるのはうれし

た「つながり」の再生が、これからのお寺を支えていくことを実感する。「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する」ことは、単に宗門が掲げた理念や目的ではなく、念仏者としての「私」の社会実践であるとともに、「持続可能なお寺」の根幹を成すものであると、寺小屋の活動は教えてくれている。

（長原真了）

※相対的貧困：命の危機に瀕するほど衣食住が欠如する状態を示す「絶対的貧困」に対して、「等価可処分所得の中央値」の半分に満たない所得の状況を相対的貧困と定めている。およそ年間所得が120万円程度未満とされ、生き延びられるが、生活は充足されず、さまざまな権利や環境が享受されない状況を示す。



このようなご時世

だから

改めて考える

私の位置・方向



この約2年間、日本をはじめ世界中で新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐため、さまざまな対策を模索し、実行してまいりました。現在も感染拡大を防ぐさなか、時には、日常や各職種に対し何らかの制限が設けられ、その為、生活の様式が一変しました。外出時、今では無意識にマスクをつけ、外出先では、必ず消毒や検温といった流れ。人との会話では、「このようなご時世ですから」という言葉がめっきり増え、その言葉だけで会話が成立してしまう場合もあります。生活そのものが「不安定」になってしまい、自分が持ち込んでしまったウイルスにより、家族が感染してしまったりと考えますと、おのずと自宅にいる時間が増えます。お互いにピリピリと神経を張り詰め、心に余裕がなくなります。一人暮らしの方ですと、益々人との会話が減り、疎外感や孤独感を感じてしまうかもしれません。心に不安をかかえてしまいます。

私は、このようなご時世にあつて、住職として、門信徒の皆様とお話しをさせていただく中で、数多く心の不安をお聞かせいただきました。そのよう

な中、「きずな」や「つながり」という私がよく用いる言葉の意味を改めて考えなくてはならないと気づかせていただきました。

この度、本誌『きずな』をお読みくださる皆様に、私が今までお聞かせいただいたお声を少しでも共有できればと、ここに綴らせていただきます。

”気持ちや、思いに
気がつけない私”

ここ最近、「お墓をしまいたい」というお声が以前より多く寄せられます。お話しを聞かせていただくと、各ご家庭にはご事情があるようです。特に、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、県を越えてのお参りが困難なこと。ご自身の代でお参りする者がいなくなるなど、様々な理由をお聞かせいただくのですが、そこには、共通していることがございます。それは、お墓を自身の代で終わらせてしまう申し訳ない気持ちが込められているのです。「長年、守ってきてくださった

皆様に申し訳がない」それぞれ葛藤の末、断腸の思い、無念さをかかえ「お墓をしめる」決断をなさっている訳です。本意としては、「できる事なら存続させたい」「これからも守っていきたい」というお気持ち、それぞれに伝わってまいります。不安な気持ちはお墓の事だけではありません。年回のご法要等、仏事に關しましても、延期や中止、人数の縮小や簡略化など、自身の思いとは裏腹に、時に厳しい決断をしなければならぬ状況だと聞かせていただきました。

さらに、こうした状況や思いにより、お寺との今後の関係、つながりを心配なさるお声をいただきます。以前、お墓の事でお寺へ相談くださった方に帰り際、言われた言葉があります。「お墓はなくなりませんが、今後とも変わらずお付き合いください。宜しくお願いします」その言葉を聞かされた時、私は、本当に聞いてもらいたかった思いをしつかりと聞くことができていなかった事に気づかされました。お墓の事への回答を急ぐあまり、相談くださった方の、お墓をなくした後、お寺とのつながりについての心配や不安に気づく

事が出来ませんでした。私は、今回に限らず、今までお寺に相談くださった方々に対して、住職としてどこか上からの物言いになっていなかったらうか、また、お寺とのつながりを危惧させてしまうような関わり方をしてきたのではないだろうか、振り返らなくてはなりません。私自身、お寺の在り方、人とのつながりを改めてみつめなおさなければならぬと強く感じさせていただきました。

”御同朋・御同行を改めて
味わわせていただきますと”

宗祖親鸞聖人のお言葉に「御同朋・御同行」というものがあります。一般的に「同朋」と言いますと、友人や仲間という意味があり、仏教教団におきましては、同じ教えを共に聞き、人生の拠りどころとしている人を意味します。「同行」と言いますと、一般的には、共に連れ立っていくという事で、仏教教団では、共に心を同じくして仏道を修める人を意味します。

ところで、親鸞聖人はなぜ同朋や同行に「御」の字をおつけになられたのか。この「御」の字にこそ、親鸞聖人が人とつながるに当たり大切になさっていたお気持ち、思いを味わわせていただくことができます。親鸞聖人自らが、お念仏の師となるのではなく、阿弥陀様のおはたらきに優劣は無く、皆等しく救いの目当てなのだと自覚なされ、お念仏をいただく仲間への敬意を「御」の字に込め、「御同朋、御同行」と語りかけられたのだと味わわせていただきます。

一方で、私の姿はどうでしょうか。お寺に来る方々の気持ちや思いよりも、住職としての一方的な意見、思いをおしつけてはいないか、省みなければなりません。【このようなご時世】を一緒に、今一度立ち止り、自身の立ち位置、向かなくてはならない方向を確かめなくてはなりません。親鸞聖人のお言葉に込められた人とのつながり、思いを味わわせていただくと共に、そのような生き方を求め続けなければならないと感じさせられました。

(藤田 浩道)

御正忌報恩講法要によせて

長野教区では門徒総代会主催のもと、例年本山の御正忌報恩講法要に団体参拝しているが、残念ながらこの二年はコロナ禍により休止となっている。そこで本号では、参拝が困難ななかにおいても御正忌報恩講法要の状況を伝えるべく、その様子などを紹介する。(当初現地での取材を予定していたが、2022年1月現在、感染が急拡大したことからインターネット中継での参拝となった)

コロナ禍での御正忌報恩講法要

今年度の御正忌報恩講法要は新型コロナウイルスの変異株、オミクロン株による感染第六波の渦中、1月9日から16日にかけて修行された。昨年度同様各教区より団体参拝の受入れはなく、現地参拝は当日受付のみ。感染予防対策として参拝席を両堂あわせて235席(普段は2,000席程)に制限し、関連行事も直前の急速な感染拡大を受け多くが取り止めとなった。また、現地で参拝できない方々のためにインターネット中継にて法要の様子がライブ配信された。

心に残る言葉

コロナ禍以前、御正忌報恩講法要は期間中全国から約五万人の門信徒らが参拝していた。当時の賑わいを知る分、画面越しに伺える御堂内の等間隔にあけられた空間が隙間のように感じられ、胸が締めつけられる思いがする。それとともに、感染症により大きく変容してしまった厳しい社会状況を改めて思い知らされた。

とはいえ、限られた環境のなか、自宅にいらでも法要に出遇えるのはありがたい。もちろん毎座参拝することは難しいが、そんな折、1月11日速夜法要前の御堂布教において聴かせていただいた言葉が非常に心に残った。ご講師は大阪教区の星野慎行さん、「よき人の仰せ」と題し、阿弥陀さまの救いのはたらきについて布教されるなかで、星野さんは来年三十三回忌を迎える山本仏骨和上の言葉を紹介された。

「命恵まれていると色んなことがやってくるよ。私にとってありがたいことも私にとって好ましくないことも、色んなことがやってくるよ。だけどそれはね、朝と夜があるようなものだ。雨が降っているというのも、何で今日雨なんやろと心配す



るのではなくて、不足を言うのではなくて、雨の日は雨の日で阿弥陀さまに願われている命やな。そういただいでいこう。あきらめるんじゃない。阿弥陀さまは色んなことを乗り越えていかねばならない私をしっかりと支えてくださっているんだ」

この言葉にハッとさせられた。コロナ禍となり多くの法要行事がやむなく中止延期を余儀なくされるなかで、いつの間にか何事においても「しょうがない」「仕方ない」が当たり前となり、本来のあり方を見失っていたのではないか。果たして自分は限られた環境において精一杯の行いが出来ているのか。自問自答するなか布教が終わり、法要が始まった。参拝者の方々が一同に合掌される。そこには同じご縁であるにも関わらず画面越しという環境により臨場感が失われ、手も合わせず只々傍観する私の姿があった。

1月15日速夜法要後のご親教で専如ご門主は「どのような状況にあっても、これからも阿弥陀さまのおはたらきを聞き、お念仏の中に日々を過ごしてまいりましょう」と示された。親鸞聖人が仰がれた阿弥陀さまの救いのはたらきは、いつでもどこでも私を願い続け支え続けてくださっている。今後、2023(令和5)年には親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要がご修行となるが、先の見通しが立たない現在、どのような形で法要が行われるかはわからない。しかしながら、どんな状況にあってもこのたびの御正忌報恩講法要のように、困難を前に立ち止まっている私のあり方を問うていく、そんな勝縁になることを切に願う。

(滋野 顕慈)